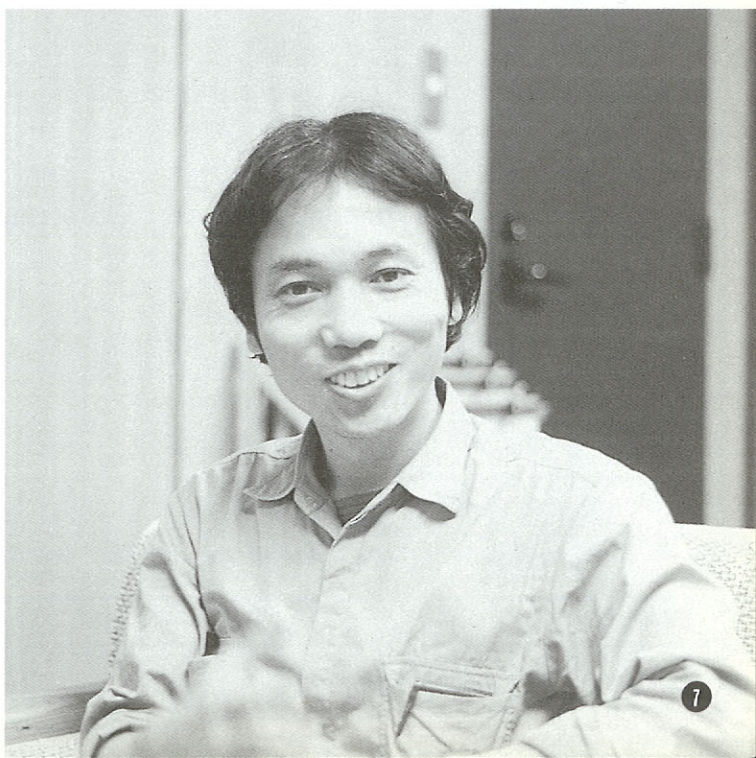


「阿蘇は、僕の心のふるさとなんです。」

葉祥明さん



絵本作家、メルヘン画家、そして、詩人としても幅広い人気を誇る熊本市出身の葉祥明さん。熊本近代文学館で開催された個展に合わせて帰熊された葉さんにインタビューしました。

◎天職は詩と油絵

「個展はよく開かれるんですか。」

いいえ。デパートなどで開く原画展などを除くと、初めてなんです。今回のものは、詩稿、油絵、メルヘン画などを一堂に揃えた本格的なものですからね。ちょうど良いタイミングで、この話をいただきました。実は5年前に体調を崩してからというもの、メルヘン画もやめていたんです。以前の作品

を振り返るのも嫌になって、屋根裏部屋に封印したままでした。でも、去年あたりからやっと体調がもどり、これまでの歩みを振り返ってみようかなと思っていたんです。これで埃をかぶったままだった作品たちも目の目を見ることができたし、僕としても、ひとつ踏ん切りがついたという感じですね。

「新しいスタートですね。」

まったく、そうなんです。ここ数年の間に、自分の中でひとつだけはっきりしたことがあります。それは、僕の本当にやりたかったこと、天職ともいうべきものは、詩と油絵じゃないのかなということなんです。もちろん実際には、



絵本の仕事やメルヘン画が多いのですが、それは、生活のためにやる仕事であって、自分のためにやるものではない。詩や油絵は、作ろうと思っただけのものじゃない、というのが僕の考えです。木の葉が散っていくのを静かに見つめる、風の音に耳を澄ますというよさうな牧歌的な生活を送っているうちに、突然「やってくる」ものなんです。朝、目を覚ました瞬間にわかりますよ。「今日は詩の日だな」とかね。そんな日は一日中、自然に言葉が湧き出してくるんです。不思議な感じですよ。努力も何もいらぬ。そして、半日か一日で、それがスッと消えていく。油絵の時もまったく同じです。これは

もう、自分の意識を超越した領域ですね。いつもできるというものじゃない。そして、詩も油絵もできない心の曇った日には、しかたないから生活のための絵を描いているんです。(笑)

◎21世紀は精神文化の時代

「葉さんの作品というと、運かに広がる地平線といった風景を連想するのですが。」

「永遠」果てしないものが、僕の作品のテーマなんです。やはり子供の頃に見た阿蘇の風景の影響が大きんじゃないかなあ。熊本市で生れ育ちましたから、林間学校などでよく阿蘇には行ったんです。たいへんなインパクトでしたね。青い空、白い雲、緑。心の中は、いつも阿蘇の自然でいっぱいでした。街中で暮らしていても、心はいつも上の空。ああ、阿蘇に生まれればよかった。阿蘇で毎日を通り越せばよかった。そんなことばかり考えていました。僕の絵の中の空気の感じや色彩、広がりなどは、どれも阿蘇を反映して

いるんじゃないかな。僕の心のふるさとみたいなものじゃないかな。

「子供の頃の阿蘇の体験がなかったら、葉さんの作品も生まれなかつたかもしれませんね。」

そう思います。新たな発見や驚きでいっぱいの子供時代。一日が、それが大人の一月分や一年分にも匹敵してしまうような体験の連続でしょう。そういう時期に阿蘇と出会うことができたのは、幸せだったと思います。

でも、僕に限らず皆、子供の頃には心に焼きつくような体験をしたり、風景に出会ったりしているんだと思います。ただ、それを忘れてしまっているだけですね。だから、僕の作品を見て、何か魅かれたり、心に残ったりするというのは、無意識の内にそういうものが甦ってくるからじゃないかと思うんです。それをきっかけとして少しでも子供心を取り戻し、何か別の世界が開けてきたという人がいたら、本当に素晴らしいことですね。

「何かとストレスの多い現代。葉さんの作品は、ますます存在価値を増しそうですね。」

20世紀はテクノロジーに引張られてきた時代だといわれてるでしょう。そのお陰ですいぶん便利になったことも多いけれど、一歩間違えば人類を滅ぼしかねない危険な面も持っている。これでは危ない。これからは芸術などの精神文化が、テクノロジーをリードしていくような時代が来なきゃいけないと思う。それこそ、僕らの時代ですよ。

